

本日の学び テーマ:「混乱をくぐりぬけて」 テキスト:民数記11章1節-15節

【理解の手がかりとして】

※主な参考書:日本基督教団出版局『新共同訳 旧約聖書注解I』/塩野和夫『人生は荒野の旅路—民数記を学ぶ』

この民数記のテーマは「(信仰) 共同体」であると前回述べた。第一部(1章-10章)では、その共同体としての整えのため、人口調査が行われ、各部族が配置され、カナンに向けてイスラエルは整然と出発した。

この11章は第二部(11章-20章13節)「共同体の歩み」の初めに位置する。今回は、次のテキスト(13章)までの文脈(11章-12章)までおさえておきたい。

■ 荒野における民の不満 11章1-34節

出発直後にいきなり「不平不満」の話である。前課の学びの「主の命令に従い、主のいしつけを守った」(9:23)という民の姿とは真逆の現実である。しかしそれが荒野の厳しさ、また共同体としての歩みの難しさを物語っている。

ここで民は主に聞こえるまでの不満を口にする。それに対して主が怒りを発すると、民はモーセに助けを求めた。そこでモーセは民の求めに応じて、祈ると、火(裁き)は鎮まった。これが1-3節の内容であるが、ここには明らかに「執り成し手」としてのモーセが強調されている。

4-6節では、飢えと渇きに対する民の不満が述べられる。「民に加わっていた雑多な他国人」(11:4)への言及は重要な資料。エジプトを脱出したのはイスラエル人ばかりでなかったことの証しである。

7-9節は「マナ」に関する料理法の記述である。マナはエジプト脱出の民が、40年間の荒野漂泊中の食物とした天与の賜物(出16:31-36)である。

10-13節および18-24節、そして31-34節には民の嘆き(泣き言)に対する主の肯定・否定両面の応答がある。肯定的な面では、民の「肉を食いたい」という嘆きを聞いたモーセが民の願望を主に伝え、主自身が十分食べさせようと約束する。そして最後に、主が無数の「うずら」をもたらしたので、民は二日間にわたってうずらを集めた。

否定的な面は、そのうずらの「肉がまだ歯の間にあって、かみ切られないうちに、主は民に対して憤りを発し、激しい疫病で民を打たれた」(11:33)ということ。その死した人々が葬られたところが「キプロト・ハタアワ(貪欲の墓)」(11:34)と呼ばれるほど、人間の欲望の醜さが表されている。でもこれは決して他人事ではない。

ただ、ここでその否定的な面に注目し、共同体の難しさ(人間の罪深さ)に眉をひそめるのではなく、前者の肯定的な面に注目すべきであろう。「『おいしいものを食いたい』という民の欲求に神は答えられる。人間の自然な求めを尊重し、人を生かす神がここに描かれている。ただし神は『自分を聖別しなさい』と霊的に応えられた。食べることは日常生活である。しかし、神との関わりを生きる者にとってこの日常生活も神の恵みの内におかれている。だから、感謝していただくことがふさわしい。イエスは主の祈りにおいて『私たちに必要な糧を今日も与えて下さい』(マタイ福音書6章11節)と教えておられる。信仰者にとって食べることも霊的な事柄なのである。」(塩野和夫氏)

研究者によると、前者の主の肯定的な応答の方がより古い伝承であろう、とのこと。うずら物語は、神の救助がその意図である、との見方である。救済される民の多さ、そこにもたらされる食物(うずら)の膨大さ、それはすなわち神の力の大きさ、奇跡の大きさを表すものとして受け取って良いだろう。主のご高配に注目!である。

ただ、その恵み深い主の「憤り」の心情も軽んじではないのも事実。ここでモーセに注目すると、先に述べたようにモーセは民を神に「執り成す」役割である。モーセは民の「泣き言」と主の「憤り」の狭間で苦しむ。彼は神の怒りと民の訴えとの間で板挟みになりながら、賢明に執り成し手であろうと努めるのである。選ばれたリーダーゆえの苦悩である。

モーセは正直である。それは召命を受けた時（出3章）もそうであった。「自分一人では負いきれない」との切実な訴えを述べる。その彼の訴えを聞き、主は彼と共に共同体の整えを担う者たちを選出される（11:16-17、24-30）。ここにも共同体が形成されていくプロセスがある。

■ ミリラムとアロンの反抗 11章35節-12章

この箇所には、ミリラム（モーセの姉）とアロン（モーセの兄）による、モーセがクシュの女性と結婚していることに対する非難（11:35-12:1）と、主の言葉の仲介においてモーセが占める特別の役割に対する疑問（12:2-）の二つが記されている。

ミリラムらが非難しているクシュの女性とは一体誰のことか。ミディアンの祭司の娘ツィポラのことか（出2:21）、それとも別の妻か。文脈的には後者との結婚が非難されていると考えるのが妥当。しかしその理由は判然としない。

二つ目の非難について、ここでアロンとミリラムは、モーセの預言者的職務を否定しているのではなく、モーセ以外に、自分たちにもその職務が授けられているのではないかと主張するのであるが、その主張に対して、モーセは預言者以上の存在であるという主の言葉が返ってくる。

モーセ自身は、アロンとミリラムの主張に反論しない。3節に「モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった」とあるように、彼は自らの超預言者性を主張しない。しかしむしろそこに彼が主に特別に召された資質を見るのである。

ちなみに、その「反抗」に対する主の憤りはミリラムの「重い皮膚病」（12:9）という具体となって表れる。これに関しては、この反抗を主導したのがミリラムであり、アロンについては付随的、あるいは後代の付加であると考ええる見方もある。またここにおいてもモーセは「神よ、どうか彼女をいやしてください」（12:13）と執り成している。神への執り成し手、ここにモーセの役どころがある。このモーセの姿に、後のイエス・キリストの予表があるとも考えることもできないか。

（聖書教育より）

「第1の鍵は、モーセが自分の限界をはっきりと認めていることです。・・・人は弱い時にこそ強いものです。・・・荒野の神は民の混乱に伴います。」（聖書の学び）